

近世名古屋東部丘陵を通過していた古道からの古景観

Old-Landscapes from Some Viewpoints on the Old-pathways going through the Eastern-hills of Nagoya in the Early Modern Japan

於保 俊 (OHO Suguru)¹⁾・松原 輝男 (MATSUBARA Teruo)¹⁾

1) 名古屋大学環境学研究科
Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

Abstract

Landscapes in an old age are computer-graphically portrayed. There were a few pathways on the Eastern-hills on outskirts of *Owari-Nagoya* (Nagoya-city at present) in the Early Modern Japan. People walked along the pathways to access natural resources of village-forests. The repeated consumption over many years made the area wasted reasonably. In this report, we show some reproduced figures of landscapes on the old-pathways in around 1830 to 1847. Information of factors constituted landscapes were gained from old-documents, old pictures, and the first accurate topography of the area in 1891, etc.

はじめに

都市化が進行する以前は、日々の生活のなかで自然林が視界のどこにも見えた。それが時代とともに次第に物の影に隠され、あるいは視界のかなたに退いていった。そして日常的になった人工的景観に快適さを求めて、人々は公園や街路に樹木を植えた。このように変化する以前の日常的景観はどのようなであったかを知る手段は普通には存在しない。誰にもわかる写真や絵画で知りうる景観もあるが、知りたいと思う任意の場所で手に入るというわけにはいかない。まして百年以上前ともなると望むべくもない。景観について語られることはあったとしても、記録されない限り永久に失われる。場所によっては、絵図、まれに短歌などの文学的作品、日記や行政文書に文字記録として景観は描写されているが、それらから景観を具体的に描くことは普通には成し難い。

この研究は、人がどのような地に、どのような景観を望みながら生活域を広げてきたか、時代とともにどのように日常生活的景観が変化したかを画像として再現することを目的としている。選ばれた地域は、現在の名古屋市昭和区八事から千種区東山へと名古屋東部丘陵を南北に通っていた古道を中心とする。そこには名古屋大学東山キャンパスが含まれている。この研究は名古屋大学「キャンパス・ミュージアム」計画の一部に資するものであるが、古くからの道を辿り、都市化された景観の変遷に思いを馳せるのも意義深いものがあるだろう。明治24年(1891)の「正式二万分一地形図」をはじめ、昭和十年(1935)の旧日本陸軍によって撮影された航空写真、手に入る限りの写真情報、江戸時代のさまざまな絵図、その他文字記録などの景観を描写する情報に加えて植物生態学的考察を行い、人が古道を歩きながら見たであろう景観を画像として再現してみる。実際には時間変化も含めて再現しようとしているが、この論文では160年ほど前の主ないくつかの選ばれた地域景観を静止画として掲載する。

名古屋東部丘陵を通った道

江戸時代の名古屋城下町から駿河町街道（または駿河街道）で赤池、平針へ、そこから伊保、足助、根羽を通して飯田へと向かう伊那街道は、明治9年（1876）には県道飯田街道と呼ばれるようになり、後にほぼ現在の国道153号線となった。この論文で取り上げる地域の南端は、名古屋市昭和区八事を中心として、この国道153号線（駿河町街道）の東西約1.5kmである。江戸時代からすでに名古屋人の行楽地として名高い八事村北部の天道山高照寺と東山、音聞山や川名村八事山興正寺がある（図1-a、b）。

地域の北には、江戸時代は末森村（現在名古屋市千種区）のほぼ中央を通る高針道と呼ばれた東西の道がある。高針道は、名古屋京町通から『尾張名所圖會』に取り上げられている月見坂（名古屋市千種区観月町）を過ぎ、追分（千種区星が丘交差点）を通して高針（名東区猪高町高針）に至るまでの、現在の末盛通り、東山通りおよび名東本通りと呼ばれている道にほぼ重なる。道の東南側には東山動植物園、南に名古屋大学東山キャンパスがある。これら高針道と駿河町街道には含まれた地域が名古屋東部丘陵の主な部分である。

この地域の西部分に伊勝村（昭和区伊勝町）があり、末森村と同様に都市化が進行する以前の名古屋東方田園地先端の村であった。江戸時代では、他に丘陵谷戸を利用した田と、水害にあいやすい砂入り田が地域南東の高針川流域植田村にあった程度で、丘陵地の多くは山林と荒地であり、一部は尾張藩御林であった。名古屋東部丘陵地域の1891年と2002年を比較すると、都市化の進行とともに溜池が激減したことが一見してわかる。

この論文でとりあげる道の中心は、高針道と駿河町街道を南北につなぐ里道で、現在は名古屋大学東山キャンパスである区域を通っていた（図1-a、b）。この里道の南入り口は、八事山興正寺から駿河町街道を東南に約600mの地点で、古く石坂の地名がある。そこからほぼ北へ約3kmで末森村高針道に交差する。現在の東山公園入り口から200mほどの地点である。この里道は尾張国町村絵図八事村では御林道と記されており、尾張藩の御林に至る道の意である。この御林道をここでは「八事-末森御林道」と呼ぶ。伊勝村から出て八事-末森御林道に合流する道も御林道と呼ばれており（尾張国町村絵図伊勝村、愛知郡村邑全図伊勝村）、同様に現在の名古屋大学敷地内を通っていた。この御林道をここでは「伊勝御林道」と呼ぶ。もう一本注目する道は、八事山興正寺から駿河町街道を北西に約1kmの妙見口から東に、味岡山香積院、般若台を通り八事-末森御林道に合流する「妙見道」である。この道の名はその合流点付近に天保年間（1830～1844）に創建された妙見山浄昇寺を詣でる道であったことに由来する。

この論文では、天保から弘化年間（1830から1847）頃の八事-末森御林道を中心として、高針道、駿河町街道、伊勝御林道と妙見道のいくつかの地点に人が立って見たであろう景観を画いている。この年代の設定は、地形や土地利用についての情報が寛政年間（1789～1800）愛知郡村邑の絵図と明治24年（1891）「正式二万分一地形図」により得られ、ちょうどそれらの間の天保から弘化年間に画かれた尾張国町村絵図が重要な情報源として利用できるからである。

図1 名古屋市東部丘陵地域図

- (a) 国土地理院刊行の大日本帝国陸地測量部による明治24年（1891）正式二万分一地形図（熱田）および（名古屋）をもとに、古道、古地名などを書き加えた。黄色の実線および点線：天保・弘化年間頃の各村々境、青色：溜池
- (b) 国土地理院刊行の1/25,000地形図2002年（名古屋南部）および（名古屋北部）をもとに、古道を書き入れた。赤の実線および点線：この論文でとりあげている古道。



图 1-b



图 1-a

主な地点からの景観

1. ArcView, Vue5Infinite による景観CG作成

明治24年の「正式二万分一地形図」を基礎資料として、地形、土地利用、主要な地点と建造物などの座標データおよびDEM (Digital Elevation Model) を作成した。最初に、明治24年の「正式二万分一地形図」をスキャナで取り込み、幾何学的な補正を加えた後 Adobe Illustrator に読み込み、各種土地利用(針葉樹林、広葉樹林、水田、市街地など)および等高線をトレースした。土地利用は、地図記号を『地図記号のうつりかわり』(日本地図センター, 1994) に準拠して判別し、それぞれの土地利用様態が優先する領域についてポリゴンフィーチャーとして分類した。地図記号から単木(独立樹)や街路樹(並木)とされているものは、座標データをポイントフィーチャーとして記録した。地図上には、市街地の領域を示す斜線部内に、さらに建物記号が図示されている。それらもポイントフィーチャーとして座標を記録した。等高線はポリゴンフィーチャーとして作成し、属性として標高を入力した。これらの作業は Adobe Illustrator および ESRI ArcView 上で行った。

江戸時代の名所図会、絵地図、日記などから得られる情報を元に、植生や土地利用についての生態学的考察を行い、各土地利用分類上に載せるオブジェクト、材質などを決定した。さらに、目標とする天保、弘化年間(1830~1847)頃の景観に含まれる建物の3Dモデルを作成した。屋根や壁等の形状、材質等は『滅び行く民家』『日本民俗圖誌』『尾張名所圖會』などを参考にして、3Dモデラー MetasequoiaLE により、街と農村の家屋を別々のものとして作成した。建物表面等のテクスチャは、愛知県名古屋市緑区有松の町並みを撮影し、Adobe Photoshop で加工して作成した。

DEM は、等高線のポリゴンフィーチャーを標高による白黒濃淡画像にラスターライズし、Contour Line Dilation という手法 (H. Taud, 1999) を用いて標高白黒濃淡画像を作成した。また、Adobe Photoshop により、各土地利用の上下関係、たとえば「溜池の上にはどのようなフィーチャーも載らない」等を考慮し、各土地利用間で重ね合わせ切抜きの演算を行った。DEM 作成の際に、溜池のあるところは領域選択と平均化を用いて凹凸を平らに補正した。ついで崩壊地とされるところに侵食地形シミュレーション (Paul Meakin, 1991) を適用した。さらに、境界のはっきりしない森林等のような土地利用については、ガウスぼかしにより画像処理して性質を近似し、それらを最終的に各土地利用分類の分布色調濃度画像とした。

取り上げた地域内にある各村々の寛文、寛政年間の資料(名古屋叢書続編)と、江戸から明治時代の人口変動データ(明治5年以降我国の人口)および「正式二万分一地形図」上の建物の軒数を数え、天保・弘化年間の家軒数をおおよそ推定した。それによると、天保・弘化年間の家軒数は明治24年と比べて約2/3であった。そこで、明治24年の「正式2万分1地形図」に基づいて作成した建物座標データを、明らかに天保・弘化年間に存在していたと思われる建物を除いたすべての建物を乱数により2/3に減らした。建物の向きは、鈴木・近津(2001)の方法に基づき、主要街道に近い建物は街道に面する方向に、それ以外の建物は南向き±45度の範囲に乱数で割り当てた。さらに、建物の種類を主要街道からの距離と標高によって分類し、標高の低いところが町屋、高くなるにつれて農家が多くなるように設定した。

取り上げた地域を含んで必要な景観諸要素のデータを構築した範囲はおよそ8km四方となり、普通のPCでは扱うことが出来ないほど巨大なデータとなる。そこで、LoD (Level of Detail) の考え方により、近景・中距離・遠景に分割した。それぞれの距離は『景観の構造』(樋口忠彦, 1975) を参考に400mと3kmに設定した。遠距離はカラーマップのみ、中距離はカラーマップとパンプマップ、および視覚的に顕著なフィーチャーについてのみオブジェクトを配置した。近距離はほぼすべてのオブジェ

クトを配置した。これらの操作はgeotoolsライブラリを用いてESRI Shapeファイルを読み込み、自作Javaプログラム上で行った。

これらの取り上げた地域内環境諸要素データをe-on software Vue5Infiniteに読み込んだ。読み込む際に、Javaプログラムにより書き出した座標データ等を、Vue5Infiniteに組み込まれているPython処理系上で読み込むプログラムを製作し、それにより本来互換性のないArcViewからVue5への変換を行った。得られた家屋や樹木、道路など環境諸要素を3Dモデルに載せた地域景観モデルを用いて、所定の位置における視点(図1-a、視点A～E)からの景観画像が作成された。

2. 天保・弘化年間の古景観イメージ

2-1 八事-末森御林道八事口から八事山興正寺方面

八事-末森御林道の駿河町街道側の入り口(八事口)から東へ約50mの地点(図1-a、視点A)から、西方の八事山興正寺方向を望んだ天保、弘化年間(1830～1847)の景観は図2のようであったろう。

この再現景観図に向かって手前から向こう(東から西)へ通る駿河町街道の右側(北側)に八事-末森御林道八事口が見える。この一帯は、寛政年間愛知郡村邑全図の内「八事庄八事村絵図」、天保十二年および弘化四年「愛知郡八事村絵図」によると、小松生の平松山および定納畑と記されており、畑または樹高の低いマツの疎林であったため見通しはよかったであろう。定納山、定納畑あるいは平山とは民有林あるいは畑地として使用を認められていた林域で、人々は年貢や冥加金を払って薪、芝や秣、屋



図2 八事-末森御林道八事口から八事山興正寺方面

根芽、畑の肥料などを収穫していた。このような長年の森林資源収穫とそれに起因する表層土壌の侵食流失が、その地をマツの疎林にする主な要因となる。もともと名古屋東部丘陵の表層地質は、主に八事層と呼ばれる砂礫層で、ひとたび樹木伐採や造成などを行うと深刻なガリー侵食が進行し、容易には植生が回復しない。

八事－末森御林道八事口の駿河町街道南側、図2に向かって左側は、天道山高照寺の東方一帯であり、『尾張名所圖會』の「東山の春興」に画かれている名古屋人の遊山の地であった。春興の図では天道山高照寺本堂などは画かれていない。寺領地内の樹林はやや発達したマツ林である。図2では左奥に高照寺が見えており、樹木にさえぎられなければ見える位置である。『尾張名所圖會』は天保12年(1841)に前編が出ており、そのときすでにすべての原稿は用意されているので、「東山の春興」はまさに天保年間の天道山高照寺あたりから東側一帯を描写している。ここは寛政年間、天保、弘化年間の絵図のいずれでも御林方定納山と記されている区域である。

「東山の春興」に画かれている地形は、図1-aの視点から南の地形をVue5Infiniteで再現してみると、海が見えていることを含めて非常に写実的であることがわかる。「東山の春興」の図には、帆掛け舟の浮かぶ熱田と考えられる海が画かれている。この「東山」の東1km足らずのところが、さらに古くからの景勝地として名高い音聞山で、図2の駿河町街道左手家屋前に見える道が音聞山に至る道の一つである。海が見えることは『尾張名所圖會』の「音聞山」にも画かれている。当時は東部丘陵や名古屋街中からさえも海が見えた。『鸚鵡籠中記』巻之一、元禄四年七月十六日の建中寺山門上からの勢海と浮かぶ船帆の目撃記録や、「末森村北山之絵図」「上野村東山之絵図」(共に名古屋蓬左文庫蔵)では熱田や鳴海、遠く諸崎の海に浮かぶ船までが見えると記録されている。名古屋から八事－末森御林道の八事口あたりまで駿河町街道を来ると、南側の谷間や木々の間に遠く海を見ながら歩いたであろう。当時の名古屋港海岸はかなりの干拓がすでに行われていたとはいえ、建物が低かったことも考えれば現在と比較して十分見えるほど海岸線は近かった。近年は建物や木々の陰で、あるいは空気の汚れにより、また何よりも埋め立てにより海が遠ざかったので、よほど上空からでないといへば海は見えない。

「東山の春興」に画かれている植物種の大方はマツ(アカマツ)で、他に落葉樹と思われる樹木も画かれている。樹高はいずれも高くなく、せいぜい1~10m程度であろう。名古屋東部丘陵でこのように見える二次林は、八事・唐山層と呼ばれる地層上の土壌が侵食を受けて流失した瘦地に成立しているマツ林であり、今から二、三十年前ごろまで名古屋丘陵地帯の方々で見られた。それらは長年の収奪と太平洋戦争による荒廃の後遺植生であった。ソヨゴ、ヒサカキ、ネジキ、シャシャンボ、ヤマザクラなどを伴っているが、特徴的にコバノミツバツツジやモチツツジが生育分布し、春には紫花が咲く(高木等、1977)。「東山の春興」の図に「花衣 裾もつつじの紅裏に みせばやぶりも げにやよひ山」と歌われているツツジで、上記のマツの樹下に多く画かれており、この地域の二次林ではコバノミツバツツジである可能性が高い。

図2の向かって右、駿河町街道沿いに八事山興正寺がある。興正寺五重塔が文化五年(1808)に完成して約三十年後の天保、弘化年間では、興正寺はほぼ現在の姿に近い状態だったのであることは、寛政五年(1793)と明治二十七年(1894)の興正寺絵図(八事山興正寺資料)からうかがい知ることが出来る。しかし興正寺境内(八事山)の樹木は現在よりも茂ってはいなかったであろう。上記二枚の絵図と明治24年正式二万分一地形図から読み取れる八事山の植生は針葉樹林(マツ林)であり落葉広葉樹は少ない。現在の八事興正寺の森はマツは少なく、シイ、カシ、ウバメガシ、ヤブツバキ、ソヨゴなどの常緑広葉樹と、アベマキ、コナラなどを主とした落葉広葉樹林であり、樹冠も鬱閉している。八事山興正寺の北側には、後に述べる般若台が見える。



a



b

图3 妙見道、香積院、般若台方面

2-2 妙見道、香積院、般若台方面

『尾張名所圖會』に「般若台、香積院」の図がある。この絵が画かれたと考えられる場所は図1-aの視点Bである。現在のこの地点近くには学校法人梅村学園中京大学附属中京高等学校があり、その校舎の高さ約20mの屋上から、ようやく同じ広さの景観を望める。視点Bからの景観再現図と現在(2005年7月27日)の同じ範囲の景観をそれぞれ図3-a、bに示した。視点Bは図3-bでは右隅アパートビル辺りで、その前の道が妙見道、アパートビルの向こう側の丘下に図3-aに見える古堤池があった。

妙見道は図3-a、bの左側に見える香積院門の門前を通る。中央奥の丘陵が般若台で、この山際には謝庵(しゃあん)があった。その背後に妙見山浄昇寺(後述)がある。般若台とそれに続く丘は、寛政年間愛知郡村邑全図川名村では川名御林と記載している。杖中(昭和区、いりなか)にあった古堤池と上池(籠池)、その南側に当たる図の右上隅には松並木のある駿河町街道も見えている。これら二つの池の間は「般若台、香積院」の図では草地のように画かれているが、弘化三年川名村絵図には「草野三反」と記録されている。弘化三年絵図には般若台も香積院も書き込まれていないが、それより古く寛政年間川名村絵図には香積院と、興正寺そばに香積院隠居所の文字が見える。図3-aに見える山林地の大部分は、寛政年間川名村絵図によると、「名古屋支配野方山」であった。山林の大部分には樹高のやや高いマツが散在するが、そちらこちらにガリー侵食により地肌がむき出し、マツの実生や若木の散生する林地であったろう。落葉樹らしきものはわずかに香積院の裏手に少々分布しているのみである。以上のような図3-aの説明はそのまま「般若台、香積院」の図の説明にもなるが、この図は「東山の春興」図と同様に、画かれている地形や事物は非常に写実的であるといえる。天保、弘化年間に見られたような景観は、明治24年でも大きな変化はなかったであろうことは、明治24年正式二万分一地形図からうかがえる。

般若台は「安永年中香積院前住雲臥和尚の開きし所にして、味岡山をさる事三丁餘、尤勝地にして、騷人春秋の山行、杖をとどめざるはなし」(『尾張名所圖會』)と記されているほどに、古くから景勝地として有名であった。図3-bの中央奥辺りが現在の名古屋第二赤十字病院(八事日赤)であるが、その手前(西側)の丘が般若台である。現在ここからは家々と樹木により、かつてのような名古屋方向の景観は開けていない。しかし切れ切れに見える遠望から、西方に向かって「真実の知恵」(般若)を希求するにふさわしい景勝であったことは想像できる。現在の景観構成要素の大部分は建築物であり、現代的夜景景勝地でありうる。

2-3 妙見山あたりから東山公園方向

妙見道が八事-末森御林道と合流するところに、天保三年(1832)撰津国能勢妙見山からの妙見大菩薩が祀られたという妙見山浄昇寺がある。妙見道は天保-弘化年間ではまだそう呼ばれるほどではなかったかもしれないが、名古屋から駿河町街道を通り、香積院から般若台、妙見山浄昇寺、そこから八事-末森御林道を南に下がって、ふたたび駿河町街道に合流してすぐ東の音聞山あるいは東山-天道山高照寺で遊び、八事山興正寺を詣でて名古屋に帰るというコースは、名古屋人にとって重要な行楽コースであったかもしれない(図1-a)。

妙見山浄昇寺あたりになると、東方の丘陵が一望できた(図1-a、視点C)。視点Cにおける北から北東方向の景観を図4に示した。八事-末森御林道で末森方面を左手にみながら、北東の方角には比較的豊かに樹木が茂る尾張藩御林(後述)が見える。天保・弘化年間あたりではこの範囲に人家はまったくない。この図の右手前から向こう(北)に通っている八事-末森御林道の右側(東側)一帯は植田山や、植田・高針・末森・八事村四村入会山である蛇崩山と風巻山御林と言われた土地である。このあ



図4 妙見山あたりから東山公園方向

たり一帯は時に尾張藩御狩場になった（八事辺御狩場地図、辰正月）。現在八事日赤の東側にあたるこの区域（図1－b）は市街化し、展望はほとんどまったく開けていない。

前述したように名古屋東部丘陵の礫層は、樹木の伐採などの人為圧によって容易にガリー侵食が進行し、ひとたび崩れだすと短年月では復元しない貧栄養表層になりやすい。そのような条件下では矮性化したアカマツ疎林になりやすい。名古屋大学が東山キャンパスを形成し始めた昭和20年前後には、長年の収奪に加えて第二次世界大戦によるさらに激しい破壊で、いたるところにガリー侵食が進行し、植生があったとしても若年マツ疎林であったことは、昭和10年、22年とその後の航空写真によって確認できる。特に尾根部は裸地が多く、谷部にコナラやアベマキの落葉樹がマツと共にかろうじて樹高を高く樹冠を並べていた。蛇崩山と呼ばれた辺りは明治24年正式二万分一地形図において目だって崖崩れの地として記載されている。この地名は斜面の方向に互いに並行して進行するガリーを、さながら蛇が斜面を這い降りるように見たことによるかもしれない。

2－4 名古屋大学本部あたりから西北方向

八事－末森御林道のちょうど中ほどに伊勝御林道が合流する。名古屋大学東山キャンパスの南側境界付近、名古屋大学保健体育科学センターのあたりである。そこは標高約80mで、この御林道で最も高い。天保年間、御林道のほぼこの地点（図1－a、視点D）から北西方向を見ると、図5－aのような景観だったと思われる。一帯はマツ疎林、竹林、あるいは笹原で、ガリー侵食地がそこそこに見られたであろう。北西方向（図の中央右奥）、伊勝村の北側に当たる位置にくぶり池（首利池）と入船山、遠く高針道末森村月見坂が見える。くぶり池の東にのびる狭間には荒地が展開している。くぶり池は現在



a

b

図5 名古屋大学本部あたりから西北方向

鏡ヶ池と名前を変え、その広さは1980年の埋め立てによりかつての約半分の面積になっている。くびり池のすぐ南、伊勝村村地が東に細長く伸びた先に茨原池があった。この池は埋め立てられて名古屋大学附属中・高等学校のグラウンドになっている。茨原池の南は名古屋野方御新田で川名村村域である。

これらの地に現在の名古屋大学東山キャンパスのほぼ半分、大学建物の大部分が分布している。名古屋大学敷地は、天保-弘化年間ではそのほとんどが定納山であり、地形は現在よりも多様に起伏していた。この定納山の一部を地ならしして名古屋大学の南西半分の敷地が造成された。現在は図5-aのような景観を望める地点からは、樹高約10~15mの樹木により景観は開けていない。最寄りの高さ約20mの名古屋大学インターナショナルレジデンスの屋上からほぼ同じ方向の景観を図5-bに示した。図5-aと比較すると、地ならしして名古屋大学の文、教、法、経済の諸学部、工学部、中央図書館および名古屋大学博物館などの建物が建てられたあたり（図5の右側ビルマンションを除いてそれより右側建物群）に、著しい地形の変化があることがわかる。

図5-aの左側に白く見える伊勝御林道は川名山の北を通っていた。川名山の広い範囲は現在南山大学の敷地である。この一部は天神山と呼ばれていたらしいが（尾張国町村絵圖、伊勝村）やはりマツ疎林であったろう。

くびり池と茨原池の向こう（西方）は伊勝村から末森村の田地が展開していた。はるかに名古屋の街がみえ、その向こうに伊吹山や揖斐の山々が現在と同じように遠望できた。

2-5 星が丘、東山公園付近から西の城山方向

信州飯田から名古屋へ物資を馬で運ぶ伊那街道は信州側からは中馬街道と呼ばれた。愛知県側の中馬宿としては足助宿（現在豊田市足助）が有名で、ここを朝に出て、夕方には平針宿（名古屋市天白区平針）に着く。翌日は駿河町街道を平針、八事経由で名古屋である。別の経路の一つとして、足助から平針宿には向かわず、藤枝（現在日進市藤枝町）迂りで伊那街道を別れて岩崎を通り、一夜を高針宿（名古屋市名東区高針）で過ごす。翌朝高針を出て乗越峠（のこし、のっこし）（図1-a、b、現在の星が丘と高針間の道である名東本通の最高点）を越え、追分（現在千種区星ヶ丘交差点）から左手南側の尾張藩御林（現在名古屋市東山公園東山植物園）のやや茂った樹林を見ながら七ツ釜池（新池）のほとりを過ぎ、源蔵池（胡蝶池）の北約200m（現在の東山公園動物園入り口近く）まで来ると、西方名古屋方向に末森（千種区城山町城山八幡宮・末森城址）が見えた。これをうたった馬子唄がある。「馬よあよべよ あよばにゃたたく 歩ばや 喰わせる あすばせる」「乗越こえりゃ 末森が見える 末森こえりゃ 名古屋が見える」（ほとんど忘れられている馬子唄だが貴重なので以下参考文献に引用する）。

すっかり都市化された現在の名古屋市東山公園付近の路上からは、この馬子唄にある末森城址の城山を見ることは出来ない。しかし、150年ほど前のこの道をArcViewのプラグインであるArcSceneによってたどると、最初に末森が見える位置は図1-a、視点Eで、この迂りは一ノ嶺坂と呼ばれていた。ここから末森方向の天保から弘化年間の再現景観を図6に示した。

末森が見える位置から八事-末森御林道の末森村入り口（末森口）（図6左側の道は高針道で、その延長の左側）も見えた。尾張藩御林で作業をする人々がこの道をやってくると、大藪池と源蔵池のほとりの道を通って東側の御林に入る。この尾張藩御林は現在の東山公園一帯で、末森山、植田山などと呼ばれる藩有林であり、比較的良く保護されていた。これらの御林には特にマツの大木やトチ、ハンノキなどの大木が茂っていたようであるが、圧倒的にマツが優占していたであろう。『鸚鵡籠中記』宝永六年九月十九日に、植田山でマツタケを多数収穫したと記録されている。マツタケがよく生えるのは20ないし30年生のマツで、胸高直径20cm程度のおそらくアカマツが当時の藩有林には多く生育してい



図6 星ヶ丘、東山公園付近から西の城山方向

たことを示している。宝永から140年ほど後の天保、弘化の時代も、御林として保護されつつ主にマツの伐採と再生がくりかえされ、景観はそれほどの違いはなかったであろう。天保の頃の植田山は、天保六年二月の「植田山追狩」の図（『名陽見聞図会』）に画かれているようにマツが優占する山林であったろう。明治はじめの改革期に、これらの御林からトチ、ハンノキやマツの大木の盗伐が行われた。つかまった者は桃巖寺に集められ、「九平」という名の巡査が盗んだ木の本数に応じて尻を打ったという話が記録されている（『星ヶ丘よもやま話』）。現在の名古屋東部丘陵地帯にはトチやハンノキ、マツタケは分布していないかひじょうにまれである。

八事－末森御林道末森口辺りから西は、谷戸田も含めて、東の七ツ釜池、大藪池、源蔵池や北の猫ヶ洞池の水を利用して田畑が広がっていた。やや高台の田代村（現在千種区本山）は図6の中央に見え、ここには古くからの集落があった。この丘の先端あたりが現在の本山交差点、その右手さらに奥が城山である。これらの景観も、現在は地上30、40mほどからでないと、主に建物に阻まれて望むことができない。

おわりに

わが国近世の山林資源は田畑の肥料、燃料、建築材、山菜などとして収穫利用された。特に人里近くの山林地では、日常的に肥料および燃料の収穫を長年繰り返すことにより、その土地を瘦地化させた。名古屋東部丘陵地帯の表層は砂礫であり、表層の攪乱により著しく裸地化が進行する。再生する植生としては痩せて乾燥した土地に適応した草本類と、マツ、シャシャンボ、ソヨゴなどの先駆的陽樹であり、山林資源の利用を止めない限り、植生遷移の進行は遅く、マツ疎林に留まるであろう。東山丘陵地

帯が現在のような林相になったのは、田畑の肥料が落葉落枝から化学肥料に替わり、また燃料革命による立木の残存と、都市化により田畑がなくなった、などによる。その結果一帯の景観は著しく変化した。東山丘陵地帯の緑地率は現在のように都市化が進行しても大きく変化せず、より豊かに茂っている。しかし、建物と樹木により遠望はきかず、視界が狭くなった。視界のひろがりには上空20mほどで、ようやく都市化する以前の視野が広がる。視野の広さに関しては「森の民」と同様の日常環境である。この論文でとりあげた天保・弘化年間では、日常的な、いわば等身大の視点で広大な視野が開いていた。緑地率は現在と大きな違いはないが、樹高の低いマツの疎林が優占し、非緑地は浸食により荒地化していた。したがって、視野の広さに関しては「砂漠の民」と同様な日常環境であった。

この研究（代表：名古屋大学博物館館長 足立守教授）の費用の一部は、平成16年度赤崎記念研究奨励事業に依る。

文 献

Hind Taud, J.F. Parrot, R. Alvarez, (1999) DEM generation by contour line dilation, *Computers&Geosciences*, **25**, 775-783.

樋口忠彦『景観の構造』(1975) 技報堂

歌月庵喜笑『名陽見聞図会』服部良男編 美術文化史研究会創立25周年記念出版、昭和62年

川島宙次『滅び行く民家－屋根・外観』(1973) 主婦と生活社

小林 元『千種区物語』名古屋東部の古道と町なみ 平成12年(2000)6月1日 ブックショップ「マイタウン」

Paul Meakin, (1991) Fractal aggregates in geophysics, *Reviews of Geophysics*, **29**, 317-354.

本山桂川『日本民俗圖誌』第4冊住居篇(1943) 東京堂

鈴木沙耶佳、近津博文、(2001) 歴史的町並み(妻籠宿)の3Dモデリングと景観シミュレーションに関する研究、日本写真測量学会平成13年度秋季学術講演会論文集、213-216

高木典雄・高橋千裕・松原輝男・広木詔三(1977) 名古屋大学構内の植生(I) 樹木相と樹林構造、名古屋大学教養部紀要B(自然科学・心理学)第21輯、93-111.

『名古屋叢書続編』第1巻 寛文村々覚書(上)、昭和39年9月30日発行、名古屋市教育委員会編

『名古屋叢書続編』第9巻 鸚鵡籠中記 卷之一

『地図記号のうつりかわり』(1994) 日本地図センター編 日本地図センター

『尾張名所圖會』上巻(卷之五)大正8年1月7日発行 大日本名所圖會刊行会

『尾張国町村絵図』一名古屋市域編一 徳川黎明会編 昭和63年(1988)4月20日発行(全5冊)のうち、II、III 国書刊行会

『星ヶ丘よもやま話』名古屋市星ヶ丘小学校創立5周年記念特集 昭和42年3月20日刊、名古屋市星ヶ丘小学校PTA

『愛知の民謡』一民謡緊急調査報告書一 昭和54・55年度 愛知県教育委員会 昭和56年3月31日発行 37ページ 追分の項:「次の馬方節は、加藤金蔵の演唱である」として、次の歌詞が記されている。「馬よあよべよあよばにゃたたく 歩よばや喰わせる あすばせる」「乗越こえりや 末森が見える 末森こえりや 名古屋が見える」「わしが殿さは 今日名古屋 涼しい風吹け 空曇れ」「馬が出たでた 殿さの馬が 鈴の鳴る音 唄の声」「松になりたや 並木の松に 尾張尾州様 下に見る」「宮で振られて 笠寺越えて 鳴海畷で 袖しぼる」「馬は豆すき 馬子酒がすき 乗せたお客は 女郎が好き」「三州岡崎 矢作の橋は 二百八間 中番所」「寒狭川には 住むかよ鮎が わしの胸には 恋が住む」「寒狭川瀬の 朝川渡り 殿さの姿は 霧の中」

『天白村誌』昭和31年(1956)5月3日発行 天白村誌刊行会

『昭和区誌』昭和62年(1987)10月1日発行 昭和区制施行50周年記念事業委員会

『千種区史』千種区制施行50周年記念誌昭和62年(1987)10月1日発行 千種区制施行50周年記念事業実行委員会

国土地理院刊行、大日本帝国陸地測量部による明治24年測図「正式二万分一地形図」

国土地理院 昭和十年の旧日本陸軍によって撮影された航空写真
「末森村北山之絵図」「上野村東山之絵図」（共に名古屋蓬左文庫蔵）
「八事辺御狩場地図」（御林奉行）、辰正月（名古屋市鶴舞中央図書館蔵）
「愛知郡村邑全図」（愛知県図書館蔵）
「愛知郡八事村絵図」（徳川林政史研究所蔵）
「明治5年以降我国の人口」内閣統計局 昭和5年（1930）
「Geotools」Java用GISツールキット (<http://www.geotools.org/>)

(2005年10月30日受付)